

電氣頭

唐十郎



氣頭

十郎



文藝春秋

電気頭

一九九〇年五月一日 第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者 唐 十 郎

発行者 豊 田 健 次

発行所 株式会社 文藝春秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三一二三

本文印刷所 理想社
付物印刷所 大日本印刷
製本所 中島製本

©Jarō Kara 1990 Printed in Japan
ISBN4-16-311800-4

万一落丁・乱丁の場合はお取替いたします

電気頭／目次

第一章	電子親友	5
第二章	ヒヤリ・ハット	41
第三章	Uを求めて	81
第四章	電子質屋	121
第五章	遊び人さがし	157
第六章	ゴーゴリの娘	179

電
氣
頭

第一章 電子親友

「電子親友をどこに隠してしまったのですか。

その名はドロン。貴社の茶界^{ちやかい}さんと打ち合わせた時に、〈くるみ割り城の怪奇〉はすこぶる気に入られました。ソフトとしては、抜本的だと折り紙もつけられました。

が、あのゲームソフトは、ドロン抜きでは考えられません。しかし、貴社が出した作品には、ドロンが登場しないばかりか、タイトルまで〈くるみ姫を抱け〉と変っています。

ソフトの内容も見ました。

あなたがたは一体なにを考えてるんですか！

〈くるみ姫を抱け〉と打ち出したように、ユーザーがゲームの中で、くるみ姫と思ったものを抱くと水になってしまう辺りは、ぼくの提出した案のとおり、うまくいっています。しかし、

ユーザーがくるみ姫と見間違った女体に割れ目などはいらんでしょう。

それとも、最近出回っているポルノチックなソフトの愛好者も引っかけようという商売方針ですか？

そのつもりなら、どうぞなんでもおやりなさい。

題名も変えられ、内容も勝手に曲げられ、作者名も他の人になってしまっている以上、またそれを承知で、茶界さんから小遣い程度の金を受けとっている以上、文句は言えないことは分っています。

とはいうものの、ドロンです。

電子親友ドロンを設定したのは、恐らくこの業界ではぼくの他にないでしょう。しかも、電子親友ドロンは、〈くるみ割り城の怪奇〉を生誕の場所としているのです。

そのソフトは、ドロンにとっての巣のようなものなのです。

そのドロンをないがしろにしたことは許せません。

そのことによって告訴するつもりはありませんが、ぼくは心から、ドロンなき空疎なゲームソフトを呪う者です。

ドロンのいないくるみ姫なんか、くるみ割り城もソフトも燃えてしまうがいい！

案はおいしいところだけもらっちゃったんだから何とでも言うがいいと思っ

そこは甘いですよ。

なぜならば、あのソフトは、ドロンなくして、いじってはいけないゲームなのです。」

この抗議文は、弁天堂が〈くるみ姫を抱け〉を売り出して直ぐ田口が出したものである。それから五日経つが、なんの返報もない。握りつぶすつもりかなと思うと、腹がたち、ブロッキングされた電子親友ドロンのことばかりを案じている。

手紙に、ドロンをどこに隠したのかと書いたのは、ソフトの中で消却されたのではなく、ブロックされていると考えられるからである。

弁天堂の茶界を介して、田口はこれまでも三つのゲームソフトを開拓してきた。他社のゲームソフトは、ゲームセンターなどによくあるF1カーレースもどきのものとか、与作の木こり、あるいは、点数をかせぐだけが勝率となるSFものだが、それらのもつ単純きわまりない爽快感に、常々、つけ込む余地はないかと、茶界と田口は狙いをつけていた。

茶界は、この業界に入ってからもう十年もたつベテランだが、田口は、或る大学の理工学部を中退して、SFアニメのプロダクションのシナリオなどを手がけていた。理工学部では株の暴落に於けるコンピュータの、ユング的総下降と、大衆に及ぼすショックの緩和は、いかにして司^{つかさど}れるものかというたいそうな研究にとり組んでいたが、がんらいSF好きであ

ると同時に、大学に通いながら足をつっこんでいたアニメプロの仕事が面白くなって、株関係にたずさわるコンピュータの研究は中断してしまった。実際に株の暴落という社会現象は起こって、彼の天分は大いに発揮されるところだったが、その発揮するチャンスよりも速く、株式市場が、元にもち直すという現実をみて、急に詰らなくなってしまうところだ。さて、茶界と一緒に作ったソフトの中に〈遠洋漁業の将来〉という生真面目なものがある。実験的なソフトで販売も、とびついたら売るといふ小規模なものだったが、そこに田口の、ソフトの作り手としては、へそ曲がりの特質が見られた。

〈遠洋漁業の将来〉は、日本人四十数人が乗った南アフリカ航空機が、ガラパゴス島の近くに落っこちた事件直後に作られた。

二百カイリ問題で締め出されてから、日本、殊に九州を拠点とする漁業関係者は、遠洋漁業の可能性に力を注ぎ、舟に乗る漁師も、ジャンボ機に乗って、南アフリカに出かけるといふ現実を知った。墜落事故は、その遠い稼ぎでの不幸を報告したが、田口は、ゲームソフトに、その現実をとり込んだ。

ゲームのたどりつく先には、金色の鱗をもつ魚群が跳びはねている。そこに向かうコースとして、長い時間とガソリン代をかけた船で行く道と南アフリカ航空機で飛ぶ方途とがあり、さらに、ガラパゴス島辺りまで行かず、二百カイリを少しはみでたところで密漁をするのも

ある。また北海道の沖を中心に、ソ連の軍艦に追いかけるながら、ニシンを一網打尽にするやり方と、仙台沖で禁止になった鯨を捕まえる江戸古来の漁火漁法いかりびも設けられている。

金色こんじきの魚にたどりつくための、このどの方法も危険と、無駄になりかねない労力への不安がつきまとっている。つまり、どれもみなアヤがついている。そのアヤが失点のための伏兵となっていて、それをかいくぐりながら点数をかせぎ、金色の鱗のもとにたどりつかなければならぬ。

そのみならず、たとえ金色の魚を手に入れても、安心した時に舞いこむ二つの不幸も設けられている。

一つは、魚群を船の倉庫に入れた時に、なぜか冷凍機械が壊れているという仕掛けである。もう一つは、漁に出かけた後に残った女房が浮気をするという裏切りポイントが造られている。

これは悲惨きわまりないソフトで、売り出す前に、会社がストップをかけた。

ただ、徳川専務だけが、綿密さを評価した。田口は徳川専務に呼び出され、暴力を振るう不良少年が、よく教師に、そのエネルギーをもっと勉強に注げばいいのになあと言われるようなことを聞いていた。

そして、その綿密さはもう一本のソフトで開花した。

それは「三浦和義を越えて」という犯罪のキングを志すゲームソフトで、伏兵は十二のジミー佐古田であった。牙にかける女性には、すでに年少少女も知っている登場人物のみばかりか、土井たか子も入っていた。尼僧ヨアンナも顔を出していた。フィリピンの女性大統領アキノも誘惑の相手として登場するが、奇妙なことにアキノの尻に触ると、アキノが持っている大農園の砂糖キビ畑が燃えるという仕掛けになっていて、その意味がよく分らない。こうした無意味さは、犯罪キングの進むコースに盛沢山と仕掛けられていて、それが、このソフトをいじる若者に受け、大いに売れた。次に出した「六本木で買い物」というふやけたものも当って、田口は社長賞までもらったが、どこか満足しなかった。ゲームソフトに、リズムを持ちこんだ勝利であったが、なにか後味のわるいものが、しこりとなっていた。

この不快感を彼は、「マンションいちじく」に置いてある操子みさこのコンピュータにかけてみた。

操子は、信託銀行員で田口の恋人でもある。その操子の部屋に、銀行から払い下げられた八〇年型の古いのがあって、嘆きの壁がわりによく使っている。

「なんだろ、このきもち？」

とコンピュータに不快感を打ちこむ。

「なんだろとはなんだろ？」

が直ぐに返ってくる。

「だから、これだよ、このかんじ」

「ああ、それか」

「どうだ？」

「そうだね」

「と少しは考えてくれているのか？」

「かんがえるふりをしているだけだよ」

「つまり、キャッチしがたいのか？」

「とてもね」

「それじゃ、じかんのむだだ」

「そのじかんのむだについてなら、すこしはなせる」

「じかんはなぜむだになるのかとか？」

「じかんはいっぱいあるのです」

「ぼくらにとって、じかんはすこししかないよ」

「いいなんか、ひらきなおっているではないですか」

「でも、じかんについてしゃべることができるのは、じかんをすこししかもってないものし

かはなせないのだよ」

「すると、わたしは、あせてあせて、おおあせかいてあせりながら、ひとのようにいらいだちまわってみせるいしなんですね？」

「ふかいだろ、おまえだって、そうおもうときには？」

「ふかいがわかりません。あなたのおふかいとうみのふかさとうちがうのか、ふかというさかなもなにか、かんけいがあるのでしょうか？」

馬鹿野郎と田口は電源を切ってしまった。こうした反復会話ができるだけでも、高度なものだが、合理とあいまいさの間を、擬人法で結つないでいるだけで、それでは独り言と変へらない。「ぼくは独り言を確かめにくるだけだな」と静まり返った嘆きの壁コンピュータをみつめるばかりだった。

そんな或る日、暖房をしているホテルのロビーで、静電気に悲鳴をあげる一人の婦人を見ている。ドアのノブを掴んだ時にビリリときたらしく、毛皮をまとった婦人は、感電した片手を揉んでいた。駆けつけたボーイが安心させようと、ノブを掴んでみせたが、やはり、あわててその手を引っこめた。他のドアのノブを掴んで試すと、なんのことはなく、もう一度、問題のノブに手をさしだすと、そればかりに貯めこまれたように、またビリッときた。

田口は笑ってみていたが、ねじ回しを持った支配人まで現われて、問題のノブをドアから